國學院大學学術情報リポジトリ

2022年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC9:069.5, NDC9:160.4, NDC9:161.3 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001632

キリスト教展示の現状と課題
―諸教会の文化をいかに展示するか？―

下園　知弥

はじめに

文化の多様性 cultural diversity は、今日の文化理解における最も重要な概念の一つである[(1)]。教育という観点から言えば、私たちの社会の中で形成されてきた文化の数々には独自の形態と文脈が存しており、そこには何らかの固有の意義があるのであるから、継承者の多寡による優劣や社会への影響力といった力関係に基づく価値観とは切り離して個々の文化を尊重する、というのが今日の教育者一般に求められる基本的態度であり、この抽象的な指針をいかにして具体的に実践していくかが、現代の教育現場が直面している課題の一つである。これは社会教育施設の一種である博物館においても例外ではない。

文化一般に関わるムーヴメントとして多様性をめぐるさまざまな動きがある一方、キリスト教という宗教においては、前世紀より継続してエキュメニズム ecumenism（教会一致促進運動）[(2)]が進んでいるという流れがある。エキュメニズムとは、教派の別を超えてキリスト教全体としての一致を目指す運動・思想であり、神学思想から信徒の実生活の領域に至るまで、さまざまな文脈で一致の可能性が検討され、実践されている。注意したいのは、エキュメニズムは教派の別を解消して一つの合同教会のようなものを作るのが目的ではなく、教派の別・教義の別を維持したままそれぞれの教会が一致できる地点を探るのが目的だという点である。つまり、エキュメニズムにおいては、一致と同様に多様性も重視されているのである。

上記の特性から明らかなように、文化の多様性とエキュメニズムは決して断絶した別々のムーヴメントではない。宗教を文化の一種として捉えるならば、この二つの流れは全体と個別の関係にあると説明できるかもしれない。あるいは、あくまでも異なる文脈で発展してきた別々のムーヴメントだと理解するにしても、今日の諸議論において両者の交わる点は無いとまでは言えないであろう。いずれにしても、この二つの流れの中に身を置く「キリスト教文化の展示をおこなうミュージアム」は、各教派の多様な在り方を尊重しつつその展示をおこなうということが求められている時代状況

の中に在るのである。

本稿[3]では、そのようなミュージアムの一つである西南学院大学博物館の展示事業について、その特色を示したうえで、教派の多様性についての意識がどのように展示の中に反映されているのかという現状の取組と、その取組の中で見えてきた課題について、当該館の学芸員の視点から紹介する。

1．西南学院大学博物館の沿革・使命・特色

福岡県福岡市の西新に所在する西南学院大学は、1916（大正 5）年にプロテスタント諸派の一つであるバプテスト Baptists に属する米国南部バプテストの宣教師 C. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier, 1879–1933）によって創立された私立西南学院（旧制中学）にルーツを持つ大学である。西南学院大学の附属施設として 2006（平成 18）年に開館した西南学院大学博物館（ドージャー記念館）は、現存する西南学院最古の建築物でありヴォーリズ建築[4]としても知られている西南学院旧本館・講堂（福岡県指定有形文化財）を、1921（大正 10）年竣工当時のすがたに復元しつつ、博物館として改修した施設である。そのため、この大学博物館は、博物館としては比較的新しい存在でありつつ、建築物としては博物館よりも遥かに長い時間の積み重ねを持っているという、いわば二重の歴史に彩られたミュージアムとなっている。

西南学院大学博物館の経営理念（使命）は、「キリスト教主義教育という建学の精神にもとづき、具体的なモノ（博物館資料）をとおしてキリスト教文化の理解を深めることで、学生の教育に取り組み、その成果を学内のみならず地域社会にも発信する」[5]というものであり、この理念に即しつつ、来館者に求められているニーズ、大学博物館としての役割、時代の要請等を考慮して、四つの具体的な目標が事業の基本的な指針として設定されている。その四つとは、①「キリスト教文化の研究と展示」、②「博物館教育の支援と推進」、③「地域社会への発信と貢献」、④「現代社会への共感と提言」である[6]。また、目標として明文化されているわけではないが、上記の歴史的背景ゆえに建物や学院の歴史に関心を持って来館する市民も多いため、建築の魅力と学院の歴史を感じてもらうことも運営の基本コンセプトとして意識するようにしている。これらの使命・指針・コンセプトに即して、西南学院大学博物館は展示のみならずワークショップや市民講座、学術シンポジウム等、さまざまな活動に日々取り組んでいるところである。

キリスト教文化の教育・発信を事業の核としているというだけでも日本のミュージアムとしては大いに個性的だと言えるが、西南学院大学博物館の事業には更に個性的な特色がある。それはすなわち、「キリスト教の諸教会（教派）の文化を幅広く扱っていること」である。事実、西南学院大学博物館はこれまでにカトリック（および

キリシタン）・正教会・プロテスタント諸派（特に西南学院大学のルーツであるバプテスト）のそれぞれに注目し、さまざまな企画を立案・実施してきた。特に博物館事業の要たる展示事業においては、テーマや資料が一つの教派に偏りすぎないよう、バランスを強く意識してきた。もっともこの特色は、使命や指針のような、その博物館が一貫して目指すべき方向性として設定されたものではなく、いわば組織文化として学芸系職員の間で継承されてきたものに過ぎない。その意味で、いつ失われてもおかしくない不安定な特色ではあるが、しかしながら、この特色こそが、他のキリスト教文化を扱う博物館と比較して尚西南学院大学博物館が個性的であると断言できる要素になっていると報告者は考えている。そのため、同博物館の学芸員として勤務してきた報告者は、この特色を最大限意識しながら、さまざまな展示事業に取り組んできた。

以下の項では、上記の特色を反映した展示の取組事例、および取組の中で報告者が気づいた課題についてそれぞれ紹介する。

2. 展示の現状―これまでの取組事例―

諸教会の文化を幅広く扱うという特色は、西南学院大学博物館の常設展示と特別展示（特別展・企画展）[7]の双方に反映されている。常設展示については、展示室の細かなレイアウトや展示資料の内容・点数が年に複数回のペースで入れ替わっている

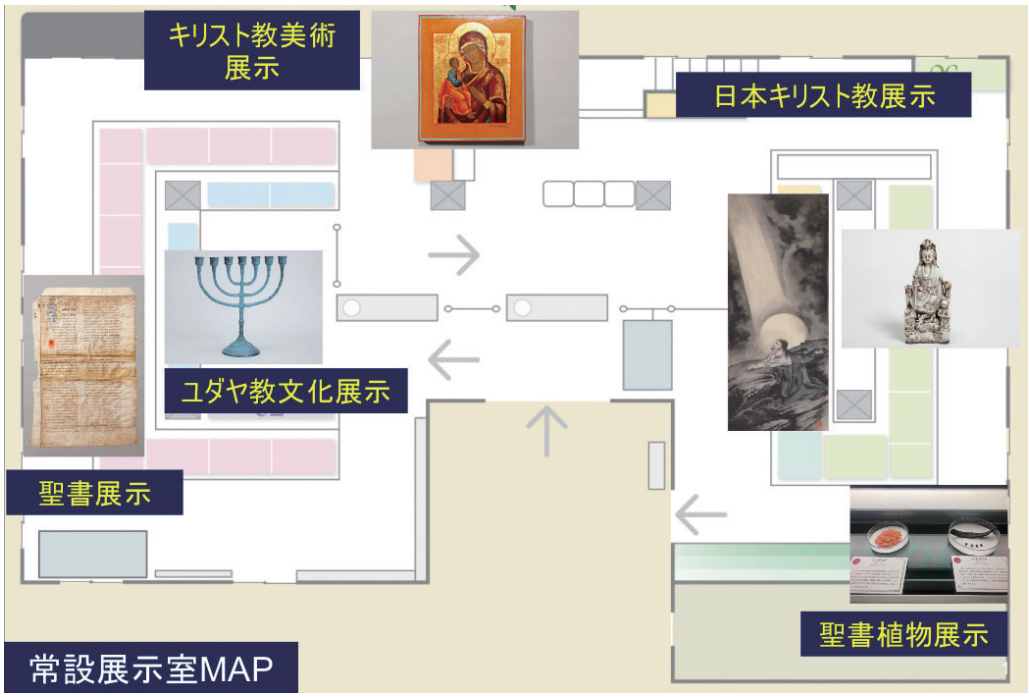

図１　常設展示室の展示構成（報告者作成）

ものの、展示構成の大枠は一貫しており、「ユダヤ教文化展示」「聖書展示」「キリスト教美術展示」「日本キリスト教展示」「聖書植物展示」が基本構成となっている（図１）[8]。この構成の中で、「キリスト教美術展示」として設定されている区画では、カトリック文化圏の装飾写本や聖画、正教会のイコンなどが展示されており、主にカトリック・正教会の文化を学ぶことができる。これに対して、「日本キリスト教展示」では、キリスト教の到来・禁教を紹介したのち、開国およびキリスト教解禁後の動向を紹介する区画において、幕末から明治期にかけてのカトリックの再布教やプロテスタントの宣教活動およびその影響がわかる資料の展示をおこなっており、カトリック・プロテスタントの諸相を日本史の文脈で学ぶことができる。このように、すべてを平等に満遍なく扱えているわけではないが、少なくともカトリック・正教会・プロテスタントという大きな区別があることは常設展示を通じて知ることができるように構成されている。

また、常設展示と特別展示の中間的な位置付けとして、西南学院大学博物館では「テーマ展示」や「博物館ニュース展示」という展示も実施している。テーマ展示は、常設展示室の一区画を使用して、同一テーマに基づく資料数点を期間限定で展示するという企画であり、普段展示していない資料の公開や学芸系職員（特に学生アルバイトである学芸調査員）の実践的教育といった狙いがある。諸教会の文化の展示という文脈で言えば、この種の企画展示には常設展示で偏っている教派のバランスを一時的に矯正できるという効果があり、実際これまで実施してきたテーマ展示の中にはそのような狙いで企画・実施されたものもある。博物館ニュース展示は、西南学院大学博物館で年に３号発行している『西南学院大学博物館ニュース』[9]の所蔵品紹介特集で取りあげた資料の実物を常設展示室内で展示するという企画である。実現までの準備プロセスは異なるものの、展示の性質的には上記の「テーマ展示」とほとんど同じであり、この展示にも常設展示では普段見ることのできない資料が展示できるという同じ利点がある。しかも『西南学院大学博物館ニュース』の所蔵品紹介は、それ自体特定の教派やジャンルの資料ばかり紹介しないことを基本コンセプトとしているため、「博物館ニュース展示」においても同様に教派の偏りを解消するという効果が期待できる。これらの小規模展示企画は、担当する職員にとっても負担があまり大きくないため、バランスの偏りを比較的手軽に修正できるというのが最大の長所である。したがって、これらの展示企画については、その長所を自覚しつつ、今後も積極的に活用していくべきであると報告者は考えている。

上記のような期限付きの展示企画や展示資料の入れ替えによって多少の調整は可能であるものの、展示構成の基本構成が変わらない以上、常設展示室で展示することのできる資料のバリエーションや点数にはどうしても限界がある。たとえば、そもそもの展示室の構成が宗教改革やプロテスタント諸派の教義・歴史を紹介することを

主眼としていないゆえに、西南学院大学博物館の常設展示室でプロテスタントについて——総合的にであれ特定の教派についてであれ——詳しく紹介することは困難である。しかし宗教改革は、キリスト教の歴史を知る上で、とりわけカトリックとプロテスタントの歴史を知る上で、決して無視することのできないトピックの一つである。このような、常設展示が対象にしていない、けれども諸教会の文化を幅広く紹介するためには避けて通れないテーマについて展示をする際に活用されるのが、常設展示室と文脈を切り離せて且つ特定のテーマを大々的に取りあげることのできる特別展示である。

西南学院大学博物館の特別展示がいかに「教派のバランス」を意識しているかが分かる例として、2018 年度から 2019 年度にかけて実施された展示企画の一覧[10]（下記）を見てみたい。

2018 年度企画展	地下墓地カタコンベの世界［**カトリック**］
2018 年度企画展	東方キリスト教との出会い：祈りのかたちとその拡がり［**正教会**］
2018 年度特別展	キリシタン：日本とキリスト教の 469 年［**カトリック（キリシタン）**］
2018 年度企画展	宗教改革と印刷革命［**プロテスタント（特にルター派）**］
2019 年度企画展	ねこ学への招待［**非キリスト教的テーマ**］
2019 年度特別展	明治日本とキリスト教：蒔かれた種［**プロテスタント・カトリック**］
2019 年度特別展	聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開［**諸教派**］
2019 年度企画展	文化財とともに生きていく：ドージャー記念館 次の 100 年に向けて［**学院史**］

この一覧から明らかなように、2 年間計 8 回の展覧会において、カトリック･正教会･プロテスタントのすべてが一度は中心テーマに設定されており、且つ一つの教派が連続して中心テーマに設定されることもなかった。また、教派の多様性という観点からとりわけ象徴的なのは、2019 年度特別展「聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開」である（**図 2**）。この特別展は、報告者自身が企画・担当した展覧会であり、企画の意図からして、現在の主題である「諸教会の文化を幅広く扱うこと」を一つの展覧会として実現・可視化することが主眼であった。テーマを広く設定しすぎたため結果として各教派の紹介がごくごく簡潔なものになってしまったという反省はあるものの、西南学院大学博物館の特色を内外に明示するという意味で、実施する必要も意義もあったと報告者は考えている。

図２　特別展「聖母の美」展覧会リーフレット（外〔上図〕・内〔下図〕）

残念ながら、2020年度以降は、コロナ禍や学芸系職員の退職･交代等の事情により、この2年間と同程度のテーマ・バランスを保つことはできなくなってしまっている。とはいえ、バランスに対する意識自体が失われたわけではなく、展覧会のテーマが偏ってしまった場合は常設展や他の企画で調整するという方向で考えており、常設展単位･特別展単位でバランスを意識するのではなく（実現できればそれは一つの理想ではあるが）西南学院大学博物館の事業の総体で可能なかぎりバランスを取る、というのが現在の考え方である。

3. 展示の課題―キャプションにおける用語・訳語の選択をめぐって―

さまざまな教派の文化をテーマとする展示企画を実施してきた中で報告者が気づいた一つの大きな課題は「用語・訳語」の問題である。日本において一般に知られているキリスト教の用語・訳語の多くはカトリックのそれであり、それと同等ないし次点でプロテスタント（「牧師」など諸派で共通の用語の場合）となっており、正教会の用語･訳語はほとんど知られていない。たとえば、イエス・キリストの母マリアをどのような称号で呼ぶか、また日本語に翻訳するかは教派によって異なっており、カトリックでは「聖母」の称号がしばしば用いられるのに対して、プロテスタント諸派では聖母の称号は使用されない傾向にある。しかし「マリア」という人名表記は双方に共通している。これに対して正教会では、「生神女（しょうしんじょ）」という称号が一般的であり、人名表記も「マリヤ」とされている[(11)]。したがって、正教会の用語・訳語としては「生神女マリヤ」と表記するのが正式（一般的）なのであるが、この表記をキリスト教関係の書籍や印刷物で見たことがある人はほとんどいないであろう。

このような用語・訳語の偏りの原因は、日本とキリスト教の歴史的関係もさることながら、各教派の信徒数、すなわちマジョリティかマイノリティかに依るところが大きい。文化庁統計『令和3年度 宗教年鑑』[(12)]によれば、令和2年度のカトリックの信徒数は524,338人、プロテスタント（諸教派の総計）の信徒数は506,572人、そして正教会の信徒数は8,991人となっている。つまり、正教会は現代日本においてマイノリティであるがゆえに、その中で使用されている用語・訳語も一般に知れ渡っていないのである。

正教会がマイノリティであること、それゆえに正教会の用語・訳語が一般的ではないのは如何ともしがたい事実であるとして、問題となるのは、この「一般的ではない」用語・訳語を博物館の展示へいかに取り入れるか、という点である。多様性の時代において求められるべき教育の方法は、それぞれの文化を尊重し、言及する際は可能なかぎり元の文脈を保つことである。現在の主題に即して言えば、各教派の文化について解説する際には用語・訳語もその教派のものを使用する、という態度が原則として

博物館には求められる。ではそれは現実的に可能なのかと問われれば、可能な場合もあれば非常に難しい場合もある、というのが報告者の率直な所感である。

一つの教派だけに絞って特集している特別展や企画展、あるいは解説のための紙面を大きく確保できる媒体（ポスター展示など）の場合には、各教派の用語・訳語の別はそれほど問題にならない。たとえ一般的でなくても、丁寧に解説すれば良いからである。しかしながら、常設展示においては事情が大きく異なる。先に示したように、西南学院大学博物館の常設展示は、一つの展示室の中に複数の教派の関連資料が混在するという構成になっている。展示によっては、教派の文化の違いを明瞭にするために、異なる教派の類似したテーマの資料を並置することもある。それでは、このような展示構成において「各教派の文化について解説する際には用語・訳語もその教派のものを使用する」という原則を厳格に適用した場合、キャプションはどうなるだろうか。可能性は二つ考えられる。一つは、狭い余白・小さいフォントサイズで用語・訳語について事細かに補足解説されているキャプションになるという可能性。いま一つは、特に説明もなく新出の用語・訳語が頻出するキャプションになるという可能性。

エルサレムスカヤの生神女

Theotokos of Jerusalem

1816年／ロシア／板にテンペラ、金箔

本資料は生神女マリヤを主題にした「エルサレムスカヤ（エルサレム）の生神女」と呼ばれるタイプの正教会のイコンである。背景に金箔を用いており、すりつぶした顔料を卵黄で溶いたテンペラ絵具で彩色する伝統的な技法で描かれており、銘文や生神女の衣には優美な装飾描写が見られる。本資料は2020年に修復し、一部剥落箇所が補彩されている。

時禱書零葉「受胎告知図」

Book of hours (Page of "The Annunciation")

1500年頃／ヨーロッパ／羊皮紙に活版・木版、彩色、金箔

15世紀末頃に出版された初期活版印刷本（インキュナブラ）の断片。時禱書と呼ばれる祈禱書の一種であり、聖母マリアへの祈りの箇所の挿絵であると考えられる。画面を装飾する金箔は、聖母を中心として図像全体を輝かせており、聖霊から聖母へ注がれた神の光の充溢を表現しているかのようである。

図３　各教派の用語・訳語に即したキャプションの例
上は正教会、下はカトリックの用語･訳語を採用しており、下線部分が該当箇所である。

言うまでもなく、どちらも博物館のキャプションとして望ましいスタイルではなく、来館者の混乱を招く結果となるだろう（図3）。そのため、西南学院大学博物館では、現状、先の原則を厳格に適用するということはしていない。

次善の策として現在採用しているのは、各教派の文化が誤解されないよう配慮しつつ、基本的にはマジョリティであるカトリックの用語・訳語を使用する、という方針である。たとえば図3は、それぞれ正教会とカトリックにおいて一般的な用語・訳語を忠実に採用したキャプションの例であるが、キリスト教についてほとんど知識を持たない人は元より、キリスト教の信者や研究者でさえ、正教会との接点がなければ、上側の正教会の用語・訳語が使用されたキャプションを見て困惑する可能性が高い。それゆえ、実際には、上側の資料のキャプションは「生神女」を「聖母」に、「マリヤ」を「マリア」に変えたものを採用している。

むろんこのやり方を採用したのは、それによって正教会の信仰・文化の要点が誤解される可能性は低いと判断したからである。また、こういった方法を採る場合は、博物館ニュースや研究叢書といった紙面を大きく確保できる別の媒体で用語・訳語について解説することで可能な限りフォローするようにもしている[13]。もっとも、先に「次善の策」と言ったように、報告者自身これが最良の解決策だと考えているわけではない。これはあくまでも当代の学芸員である報告者が思いついた現実的な「妥協案」であり、さしあたり採用されている事例に過ぎない。したがって、この問題については、今後も試行を繰り返し、他館の事例も調査することで、より良い解決策を見つけなければならないと考えているところである。

おわりに

本稿では、「教派の多様性」という観点から、西南学院大学博物館の展示事業について、現在の取組事例とその課題について紹介した。一つの教派に限定せず複数の教派について紹介するという試みは、文化と宗教に関わる時代の流れを色濃く反映しており、西南学院大学博物館の個性的な特色でもあるため、今後も継続していくのが望ましいと考えられる。しかしこの試みを継続していくということは、用語・訳語をどう選択していくかという課題とも向き合い続けなければならないことを意味している。遺憾ながら報告者自身は自他共に納得させられるような解決策を考案することができていないが、西南学院大学博物館には学芸員以外にも多くの学芸系職員が在籍しており、また職員の入れ替わりもあるので、今後の変遷の中でいつかより良いアイデアが生み出されるだろうという楽観的な期待を持っている。

また、本報告では用語・訳語にのみ課題の内容を絞ったが、「教派の多様性」に関して今後考えなければならない課題は他にも沢山あることを付言しておきたい。

たとえば、博物館の展示で紹介する教派をどこまで拡大するか（拡大できるのか）という課題は、既に館内で表面化している問題である。本報告ではカトリック・正教会・プロテスタントという大枠で教派の別を語ったが、プロテスタントは西方教会にルーツを持つカトリック以外の複数の教派の単なる総称に過ぎず、正教会も同様に総称的な枠組みでその中に複数の異なる文化を持つ諸教会が存在する。前二者に対してカトリックは統一された教派なので安心かと言えば、カトリック内の多様性やカトリックが異端・異教としているキリスト教的グループをどう扱うかというまた別の問題がある。もちろんこれらのすべてを細分化して個々に取りあげることは、現実的に考えて不可能である。企画の数が膨大になるという点からしてもそうであるし、職員の能力（専門性）がすべてをカバーするにはあまりに微力である。

したがって、用語・訳語の問題にしても、扱う教派の拡大・細分化という問題にしても、理想は理想として、現在の職員には何がどこまでできるのかという現実的な視点を、私たち現場の職員は常に持っておく必要がある。しかしその現実的な視点を失わないで日々改善に取り組み続けていれば、博物館の展示は少しずつでも良いものになっていくはずであるし、10 年後、20 年後には報告者には想像もつかなかったような地点へと到達できるはずである。そのような未来への期待を以て、本稿を締めさせていただく。

注

（1） 文化の多様性に関しては、2001 年のユネスコ総会において採択・宣言された「文化的多様性に関する世界宣言 Universal Declaration on Cultural Diversity」が象徴的である。同宣言はユネスコのホームページ（下記 URL）を参照。
https://en.unesco.org/about-us/legal-affairs/unesco-universal-declaration-cultural-diversity
（最終閲覧 2023 年 10 月 30 日）

（2） 教派を超えて一致を目指す運動自体はさまざまな時代・地域に見られるものであるが、現代の全世界的なエキュメニズムに関しては、1910 年にエディンバラで開催された世界宣教会議がその嚆矢とされている（『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年、「エキュメニズム」の項を参照）。

（3） 本稿は國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所主催の令和 4 年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」（2022 年 12 月 11 日開催）における口頭発表「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」の内容を加筆修正し報告書として再編したものである。

（4） 「ヴォーリズ建築」は、明治期から昭和にかけて活躍した伝道建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880–1964）および彼の建築事務所が手がけた建築群を指す。ヴォーリズ建築は日本各地に数多く現存しており、西南学院旧本館・講堂のように文化財に指定されているものも少なくない。

（5） 西南学院大学博物館ホームページ「使命と沿革」（下記 URL）を参照。
http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/about/index.html（最終閲覧 2023 年 10 月 30 日）

（6） 同上。

（7）「特別展」と「企画展」の区別は博物館によって異なるが、西南学院大学博物館では主に展覧会事業の規模・予算に即して、規模・予算が大きいものを「特別展」、比較的小さいものを「企画展」としている。

（8）常設展示室の構成・主な展示資料については「博物館パンフレット」を参照（ホームページよりダウンロード可）。本文に図を掲載している常設展示室とは別に「ドージャー記念室（学院史展示）」も常設展示コーナーの一つとして西南学院大学博物館内に設置されている。

（9）『西南学院大学博物館ニュース』が1年に3号ずつの発行になったのは2017年度からであり、2009年度の創刊から2016年度までは1年に4号ずつ発行していた。

（10）本一覧は「企画展・特別展」に限定したリストであり、この他にも同期間には多数のサテライト展示やテーマ展示といった小展示企画が実施された。事例のサンプルが多くなりすぎるため本論では割愛したが、それらの小展示企画においても「教派の多様性」や「なるべく多くのテーマを扱う」といった意識は反映されていたことを付言しておく。

（11）本文に挙げたイエスの母マリアの称号は一例であり、カトリック・正教会には「聖母」や「生神女」以外にもさまざまな神の母の称号がある。また、プロテスタントと一言に言っても多くの教派・立場があり、イエスの母マリアについての認識も多様であるため、プロテスタントに分類される教派のすべてが聖母の称号を否定しているわけではない。

（12）文化庁宗務課による統計「宗教年鑑」は文化庁ホームページ（下記URL）よりpdfをダウンロードできる。
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/index.html（最終閲覧：2023年10月30日）
なお、プロテスタントの信徒数については、カトリックと正教会以外のすべてのキリスト教系団体の信徒数の合計とした。

（13）図3で例に挙げた「エルサレムスカヤの生神女（聖母）」は、展示室のキャプションではカトリックの用語を使用しており特に補足説明もしていないが、『西南学院大学博物館ニュース』第47号（2022年12月号）の所蔵品紹介では、「聖母」という称号の補足として、正教会の称号である「生神女」や「至聖女」にも言及している。